

『解放されたエルサレム』第六歌をめぐる

—Intorno al Canto 6 della Gerusalemme liberata—

水野留規

MIZUNO, Ruki

Il Canto 6 della *Gerusalemme liberata* si potrebbe dividere in due sezioni: quella epica introdotta dalla sfida di Argante, e quella elegiaca che narra l'amore di Erminia per Tancredi. Ricco di descrizioni degli azioni cavallereschi e di sentimenti umani, questo Canto è sicuramente uno dei più interessanti ai lettori moderni, ed anche importante per capire il contesto dell'intera poena. Di questo Canto, d'altronde, non sono tante le poesie che hanno ispirato i pittori: riporto pertanto alla fine della mia traduzione due illustrazioni prese da una edizione del Settecento. La traduzione comprende le ottave 1-70 e 79-114 (le ottave 71-78 non sono state tradotte per la mancanza dello spazio disponibile.)

キーワード: エルミーニャ、アルガント、タンクレーディ

前号で紹介した『解放されたエルサレム』(トルクアート・タツソ著、一五八一年発表)の第四、第五歌に続く第六歌は、キリスト教・イスラム教の両軍代表による一騎打ちの場面や、か弱いエルミーニャがタンクレーディの傷を癒すため敵軍の陣営に向かう場面などを含む。戦と恋という時代を超えて人々の関心に訴える主題もさることながら、人間味あふれる心理描写があつたり、逆に現実離れた魔術的・宗教的な要素を欠いていたりして、現代の読者にとつても親しみやすい歌のひとつであろう。物語の展開のうえでも非常に重要な歌である。第五歌で主役を演じたリナルドとアルミィダを除く主要な登場人物が次々と現れ、彼らの言動は後の歌における話の伏線や前提になつていく。

この歌を引き締めているのは(他の歌では折にふれて引用され、物語に或る種の威厳を与えていた)十字軍史の記述ではなく、表現上の範となつた過去の偉大な文学、とくに古代ローマの詩文である。たとえば、ホラーティウスやウェルギリウスの詩句を下敷きにしたエル

ミーニヤの眩き(百三、百四節)などは見事であり、きわめて格調高い。憂いと期待が入り混じったその眩きは、他の名場面(たとえば第十二歌におけるクロリンダの死の場面)でもしばしば感じられる静謐な軽やかさをも含んでいるようであり、タツソの詩的世界の真骨頂が発揮されたくだりのひとつであると言えるだろう。

原詩は前号でも述べたように西洋の美術・音楽に少なからぬ影響を及ぼしている。第六歌の詩文に関してはさほど多くの絵画作品を生まなかつたが、十八世紀の画家による銅版画二点を拙い訳文を補う参考資料として挙げたい。

第六歌訳 (一) は訳者筆、原文はイタリア語韻文、各節8行から成る)

一 だが、他方の包囲を受けている側の人々(エルサレムの町の中にいる人々)は、貯えられていた食物に加えて、ほかの食糧が夜の間には外から運び込まれていたので、先行きにこれまで以上の希望を見出し、安堵の息をついていた。「敵から攻撃を受けやすい」町の北側の壁には武器が集められ、戦闘用の設備も備えられていた。壁自体も高くされ、頑強で分厚かつたので、衝撃や揺れに対しても万全であるかのように思われた。

二 王(アラディーン)はこちら側でもあちら側でも城壁の高さを上げさせ、控え壁も増強させるために、黄金の太陽が輝いているときも、暗い空が星や月の光で白ばむときも、つねに指示を出していた。そして工作員たちも新しい武器を次々と開発するために、疲労困憊するほど働いていた。こうして「防戦の」準備が進められている時に、痺れを切らしたアルガンテが王の前に進み出て言う。

三

「閣下はいつまで私たちを、長らく包囲を受けた城壁の内側に四人のごとく閉じ込めておかれるおつもりでしょうか。私の耳には鑄鉄の作業の音や、兜や盾や甲冑がきしむ音がはつきりと聞こえます。私は「城壁の中にいるのが」何のためなのか分からないのです。かの盗賊たち(キリスト教軍の兵士たち)は畑や町を好きなように荒らしています。われわれの中にはかれらの進撃を止めようとする者がおらず、ラツパを吹いてかれらの眠りを醒ます者さえいないのです。

四

かれらの昼食に邪魔や中断が入ることはなく、かれらが催す華やかな宴も妨害されることはないのです。いやまさしく、かれらは安全と平穩のうちに昼の長い時間と夜を過ごしているのです。閣下はそのうちに、窮乏と空腹を強いられる降伏を余儀なくされるでしょう。あるいは、もしエジプト軍の到着が遅れるならば、臆病者としてここで死ぬことになるでしょう。

五

私は自らの恥ずべき死によって自分の人生が忘却の闇に包まれることを望みません。明日、太陽の幸いなる光が射し込んだとき、この扉の内側に監禁された状態でいたくもないのです。この私の命については、願わくば運命の女神が、天ですでに定められているように処ざれんことを。少なくとも運命の女神は、私が剣によって手柄をたてないうちに、そして復讐を果ないうちに、私の命を奪ったりはされないうちを。

六

もし閣下のかつての武勇が閣下の内でその火種をまだ宿しているならば、私は闘って名譽の死を遂げるよりも、勝利して生き長らえることを願っているのです。ですから覚悟を決めて、敵軍と運命とに対峙して、われわれはともに進みましよう。大きな危険に晒されたとき、もっとも大胆な決心をすることが、もっともよい結果をしばしばもたらすのですから。

七

しかし、閣下があまり大胆な行動をとろうとなさらず、自分の軍勢を引き連れて出陣しようとなれないならば、せめて二人の戦士によってこの重要な戦いの勝敗が決められるようにお計らいください。フランク人の隊長がわれわれの提案に少しでも関心を示すように、「決闘で用いる」武器については相手に選ばせ、「それぞれの決闘者が立つ」位置についても相手に決めさせ、「決闘の」条件についても相手に定めさせてください。

八

もし二本の腕と一つの魂をもつ者が私の相手であるならば、いかにその男が勇敢で大胆であっても、私の擁護する正義が何らかの不幸な偶然によって敗れるということ、閣下が心配されるには及びません。私の右腕は、運や偶然に左右されずに、完全なる勝利をあなたにもたらすのであり、閣下が私の右腕に信頼を置かれるならば、私はその右腕をあなたに差し出して閣下の王国が救われることを保証しましょう。」

九

アルガンテがこう言うと、王は答えて言った、「血気盛んな若者よ、おまえはわしを見て年老いていると思っているが、わしの両腕は剣の扱いに関してそれほど鈍くなっていないし、わしの心も立派に誇らしく死ぬよりは恥ずべき安樂な死を望むほど覇気がなく臆病にもなっていない、たとえわしが、おまえが予告しているような空腹と窮乏を心配したり、恐れたりしているとしても。」

十

神よ、かような不名誉を取り除きたまえ。ほかの者に対しては意図して隠していることを、おまえには明かしておこう。「キリスト教軍に撃破された」ニケーアのソリマーノは自らが受けた辱めに対する報復を期して、分散して放浪していたアラブ人の軍団を遠くはリービア（アフリカ）から寄せ集め、われわれの敵（キリスト教軍）に夜襲を仕掛け、われわれに援軍と食糧を送ろうとして

いる。

十一

かれはまもなくここに到着するだろう。その間にわれらの支配する諸都市が敵の攻撃を受けて陥落したとしても、王のマントとわしの誇りである王宮とが無事であるならばわれらとしては構わない。おまえはその過剰なほどの大胆さと闘争心とを神の助けによって少し抑えるがよい。おまえ自身の栄光とわしが必要報復のためには、機が熟すのを待つのだ。」

十二

ソリマーノを宿敵とするサラセン人の荒武者（アルガンテ）は「自らの提案が拒否されて」すでに強く憤っていたが、王がそのソリマーノに非常に大きな期待を寄せていると聞いて、いっそう苦々しく思った。「閣下よ、敵と戦うか戦わないかは、閣下が自分で判断してお決め下さい。それについて私はこれ以上申しません。このまま何もしないで、ソリマーノを待たれるのもいいでしょう、自らの国を失った男に、閣下の国を守らせようとなさるのであれば。」

十三

異教徒からの解放者を天の使者ようにお迎えになればよいでしょう。私は自らのために誰かに助けを請おうとはおもわないし、この私の手によってのみ自由を獲得したいのです。ほかの者たちが眠りについていいるいま、私があの平たい場所へ降りて戦うことを、どうかお認めください。私は閣下の擁護者としてではなく、ひとりの騎士として、フランク人と一騎打ちをしたいのです。」

十四

王が答える、「おまえは怒りと剣とをもっとよいことに向けるべきであるが、おまえが敵の戦士の誰かと決闘することを、それがおまえの望みであるならば、私は止めない。」王の答えを聞いて、アルガンテは即座に伝令に向かって言う。「すぐにあの下のところへ行つて、フランク人の統率者に向つて、この俺からの重要な提案として、その部下である者たちにも聞こえるように言うのだ。」

十五

この城壁に囲まれた砦に引きこもっていることに我慢ができない一人の騎士が、どの程度自らの腕前が世に通用するものか決闘によって明らかにしたいと思っている。ついでには城壁と高いテントの間に広がっている平地でその者は一騎打ちを行うべく準備をして、自らこそがフランク人の中で最も腕利きだと思ふ者を相手として迎える。

十六

この「決闘を申し入れる」騎士は敵「キリスト教軍」が出してくる一人目、次いで二人目の者とだけ戦うのではなく、三人目、四人目、さらには五人目の者とも戦う用意があり、その者の家柄が低いことや高いことも問題としない。願わくば然るべく決闘が行われるよう計らい給え、そして敗者が、決闘の慣習に従って、勝者に仕えることとせよ。「アルガンテが伝令にこのように言うと、伝令は金の刺繍が入った真紅の胴羽織をまとった。

十七

伝令は首領のゴツフレードとその取り巻きの者たちなど最高の者たちがいる場に行つて、言う、「閣下、伝令である私が自由に話すことをお認め下さいませか。」「認めよう——司令官「ゴツフレード」は答える——いっさいの恐れを排して、要件を述べるがよい。」伝令が答える、「この貴き伝言が喜ばしいものとなるか、恐ろしいものとなるかは、やがて判明するでしょう。」

十八

そう言つて伝令は話し続け、荘重で誇り高い言葉で決闘について語った。その場にざわめきが広がり、猛者たちは伝令の言葉を聞いて怒りを露わにした。敬虔なるゴツフレードがただちに答える、「その騎士は困難な試みに立ち向かうとして、私はかれがすぐに後悔することになると信じたい。だから、五番目の相手をわれわれから出す必要はないだろう。」

十九

だが、その騎士には勝負に来てもらおう。私にはかれにいかなる妨害も受けることがない自由で安全な場を提供しよう。かれの相手となる何人かの者を私は自分の軍勢から送り出し、その者たちにかれと同じ条件で戦わせることを誓う。」ゴツフレードが話し終わると、「戦いの王」である者「伝令」は来たときに通つてきた道を引き返したが、その足早の歩みは回答のメッセージを荒々しいコーカサス人「アルガンテ」に届けるまで速度が落ちなかった。

二十

「武器を取り給え、——伝令が言う——勇ましい主君よ、すぐに。キリスト教軍は決闘を受け入れました。優れた武人たちは言うに及ばず、技量の低い者たちもあなたに挑むことを望んでいるようです。多くの者たちが睨みつけるような眼をして、手で武器を握りしめる者も大勢いました。指揮官である者は妨害が入らない場所を提供しました。」伝令がこう言うと、アルガンテは身づくろいを始め、

二十一

武器を身につけると、戦いの場である平地に少しでも早く下りていこうとした。王「アラディーノ」がその場にいたクロリンダ⁵に向つて言う、「かれが出陣して、おまえが残るといふのはよくない。おまえはわしの兵を引き連れて、かれといっしょに行くのだ。だが、正義が取り仕切る決闘の場にはかれが一人で行くようにして、おまえは軍勢をかれから少し離れた位置に引きとめておくのだ。」

二十二

王はこう言うと黙った。一同は武装すると閉ざされた町から、外の開かれた土地へと出た。先頭を進むのはアルガンテであり、かれの馬は儀式の際に常用される馬具で飾られていた。町の城壁とキリスト教軍の陣営の柵の間には隆起しているところがない平坦な場所があった。多くの人を収容できるその広い場所は、必要な人に供する練兵場として人工的に整備されたようにも思われた。

二二三

勇ましいアルガンテはその場所に一人で降りて行き、敵軍の陣営からよく見えるところに来ると馬を止めた。その大きな胸、立派な体格、驚くべき力ゆえにかれは見るからに高慢で、危険な人物であるように思われ、その姿はフレグラの地に現れたエンケラドス、もしくは低地の谷間に現れたフィリステアの巨人⁶を想起させた。だが、多くの者はかれを恐れず、そうした者はかれがいかに強いかを十分に知らなかった。

二二四

〔キリスト教軍の〕多くの兵士の中で最も腕利きとされる者は、敬虔なるゴツフレードによってまだ選出されていなかった。しかし多くの者たちの眼がタンクレーディに向けられ、その眼に期待が込められていたのを、誰もが見て取っていただろう。タンクレーディが優れた者たちの中で最高であるということは、兵士たちの顔に示された賛意によって明らかになっていた。そのことは兵士たちの間でもはつきりと声に出して語られ、司令官も目で合図をしてその発言を認めていた。

二二五

他の者たちはすでに〔タンクレーディに〕譲歩し、敬虔なるゴツフレードは自らの意図をもちや隠す必要もなかった。「行け、——司令官がタンクレーディに言う——そなたが決闘に行くことを許可する。あの悪党の狂気を押さえつけてやれ。」高い評価を受けて、勇敢な青年は自信と喜びで顔一面を輝かせ兜と馬を用意するよう従者に求めた。そして多くの者を従えて柵の外へ出た。

二二六

アルガンテが待つ広く平坦な土地の近くに到達するに至らないうちに、タンクレーディは自らの視界のうちに認めた、かの誇り高き女戦士〔クロリンダ〕の愛らしく妙なる姿を。かのじよはアルプスの山頂に積る雪よりも白い外衣を着て、兜の頬当てを顔の上方に上げていた。高みに立つかのじよの姿は、すべて

隠されることなく、タンクレーディが見るところとなった。

二二七

タンクレーディはアルガンテが恐ろしい顔を天に向けて立っている場所にはもはや目を向けず、クロリンダの姿がそこにある丘のほうを見ながら自らの馬をゆっくりとした足取りで進める。そして立ち止まると、石のようにまったく動かなくなつた。外から見たかれは凍つたようであつたが、心の中は燃えていた。かれは見つめることに喜びを感じていたのであり、戦うことにはもうあまり関心がないようであつた。

二二八

自らの挑戦に応じるかのような素振りの者をまだ誰ひとり見なかったので、アルガンテは叫んだ。「俺は決闘をやりたくてここに来た。さあ、俺と一騎打ちをするために、最初に進み出るのは誰だ。」タンクレーディは、茫然自失したかのように遠くの方を見つめ、かれの耳には何も聞こえていないようであつた。その時オットーネが自らの馬を前へと進め、「アルガンテの他には」誰もいない騎馬戦場に最初に入った。

二二九

オットーネは先ほど異教徒のアルガンテに挑戦することを非常に強く望んだ者の一人であつた。だが、タンクレーディに譲歩し、その後を追おうとする多くの者たちに交じつて鞍に跨り、陣営の外へ出た。ところがタンクレーディがほかへと注意を向け、あまり意欲的に戦おうとしないのを見て、この大胆で性急な若者はこれをチャンスとばかりに食欲に利用しようとした。

三十

虎や豹でさえ森の中をこれほど早くは走らないと思われるほど、かれは早く駆けて屈強なサラセン人に襲いかかると、相手のアルガンテも長い槍をもつて構えた。そのときタンクレーディは我に返り、眠りにも似た、精神を麻痺させる夢想から目覚め、叫んだ、「この決闘な私ものだ、止まれ。」だがオットーネ

はずでにずっと前の方に進んでしまっていた。

三十一

そのためタンクレーディは立ち止まったが、かれは心の中で怒りと恥辱とに苛まれ、顔を炎のように真っ赤にしていた。というのも、他の者が自分よりも先に騎馬戦に出るといふことをかれは自らの恥、過失と思つたからである。その間、馬に乗って突き進む勇氣ある若者はサラセン人の男の兜を剣で打ちつける。対するアルガンテは、槍の刃で若者の盾を破壊すると、続けてその鎖帷子を切り裂く。

三十二

キリスト教軍の若者は落馬した、かれが受けた一撃は、かれを鞍から突き落とすほど強烈なものであつた。だが、異教徒の男は力と勢いをいっそう増し、倒れることも鞍の上で体をよじることもなく、誇らしく、見下すような態度で倒れた者のところへ来て言つた、「降参しろ、おまえの名誉のためには俺と戦つたと言っただけで十分だろう。」

三十三

「拒否する、——オットーネが答える——これほど早く武器を置き、戦いをやめることはわれわれの間では慣例ではない。私が落馬したことについては他の者が補つてくれるだろう、私は私が受けた打撃への報復を果たして、ここで死にたい。」コーカサス出身の男は（ギリシャ神話の）アレクトーやメデューサのような顔をして、怒りで震えて、口からは火を吐いているようだった。「おれの腕前をおまえに直接知らしめてやるう、——かれは言う——おまえがおれの好意を踏みにじろうとするならば。」

三十四

アルガンテはこの時、騎士道で定められた約束事を守らず、自らの馬を走らせた。十字軍の男はアルガンテと面と向かおうとはせず、その攻撃に身をかわし、アルガンテの右腹をそのすれ違いざまに傷つけた。その一撃はきわめて強

烈で急所を突いていたので、アルガンテの右腹から引き抜かれた剣は血で塗られていた。だが、その反撃は何の役に立ったというのだろうか、それによって勝利者は氣力を失うどころか、かえって怒りと狂氣を増したのであるから。

三十五

アルガンテは走っている自らの馬を制止させ、後ろへと転回した。その転回があまりにも速かつたので、かれの敵である男はそれにはほとんど氣づかず、引き返してきたアルガンテの激しい攻撃を突然受けた。強烈な打撃を受けて、足は震え、氣力は萎え、魂は仰天し、顔は青ざめ、弱々しく疲れ果てたその横腹が硬い地面に打ちつけられる。

三十六

怒り狂つたアルガンテは悪党と化し、敗者の胸を馬が通る道とした。「傲慢な者はすべて、——かれは叫ぶ——俺の足もとに横たわるこの男のようになるのだ。」だが、無敵のタンクレーディがいまやとばかり行動を起こす。かれは（アルガンテの）残酷な行爲を許せなかつたばかりでなく、自らの過失が真摯な償いの行爲によつて許され、以前のように（勇者として）輝くことを望んだのである。

三十七

かれは前に進み出ると叫んだ、「卑屈な魂よ、おまえの悪名は勝利によつても消されない。このように非礼で邪悪な行爲をしたにも拘わらず、氣高き賞賛の証をおまえは望んでいるのか。おまえはアラビアの盜賊団か、そういった類の野蛮な者たちに与する者だろう。おまえは光を避けて、他の獣どもといつしよに山や森に入つて蠢行を行うがよい。」

三十八

タンクレーディがこう言うと、あまり忍耐強くない異教徒の男は唇を噛んで、怒りを自らに向けた。言い返そうとしたが、その声は言葉にならず、吠える獣のうなり声のようになった。あるいは激しい雷が自らを閉じ込めていた雲を切

り裂いて、そこから外へ出るように、かれの言おうとする言葉は燃え盛る胸から轟音をたてて無理やりに押し出されているようだった。

三十九

だが、両者は相手を互いに激しく威嚇して、ますます高慢にさせ、怒らせると、自らの馬を素早く速く方向転換させ、助走のために相手から一旦離れようとした。詩の女神よ、いまこそは私に声を授け給え、かの〔戦いの〕激情に劣らない〔詩作の〕激情を吹き込み給え。わが詩歌が武勲に相応しいものとなり、わが歌声が戦いの雄叫びを表現するものとなるように。

四十

双方の武人は節の多い木で作られた槍を槍支えに置いて、先端を上方に向けた。これ以上の速さは例がないと思われるほど速い走りや跳躍、これ以上の素早さは例がないと思われるほど素早い飛翔、これ以上の激しさは例がないと思われるほど激しい怒りをもって、タンクレーディとアルガンテは互いに迫り寄る。両者の槍が互いの兜の上のところで折れ、粉々になったその破片や切れ端きらめく火花が宙に舞う。

四十一

武器がぶつかる音だけで動かぬ大地が震え、山々がその音を反響させた。だが戦闘がいかに激しくなり、熱を帯びてきても、いきり立った両者が怖気づくことはなかった。一方の馬は他方の馬に向って突進し、その時の勢いときたら倒れたらすぐには起き上がれないほど強いものであった。戦いの達人たちは剣を抜くと、馬から降りて、地面に両足を下した。

四十二

それぞれの戦士は注意深く、相手の攻めに対しては右腕を、相手の腕みに対しては眼を、相手の動きに対しては足を動かした。両者は巧みに身をこなし、相手を攻撃し、相手の攻撃をかわした。円を描くように動いたり、前に出たり、引き下がったり、ある部分を攻めると見せかけて、攻めないかと相手に思わせた

別の部分を攻めたり、自らの体のある部分が無防備であると思わせたりして、術でもって術を欺こうとした。

四十三

タンクレーディが異教徒の男に対して自らの横腹が剣や盾で十分に防御されていないことを示すと、アルガンテはすかさずその横腹を傷つけようとしたが、その時かれの体の左半分が無防備の状態になった。タンクレーディは一撃を加えて敵の苛烈な剣を払いのけ、その体にも傷をつける。それから、ただちに後方に引き下がると、身構えて、相手の攻撃に備える。

四十四

凶暴なるアルガンテはおのれの体が自らの血で汚れ、濡れているのを見て、憤りと苦しみで狂ったように取り乱し、常ならぬ恐怖をもって身震いし、息をつく。そして怒りの衝動に駆られたかれは声とともに剣をも高く上げて、相手を再び傷つけようとするが、相手の突きによって肩と腕の部分を傷つけられる。

四十五

高山に棲む熊が横腹に堅い投げ槍が突き刺さったのを感じて怒りを募らせ、その投げ槍に向って襲いかかり、危険や死に大胆に立ち向かうように、コーカサスの男は傷と恥とを次々と受けて自らを抑えることができなくなり、報復しようとするがあまり危険を侮り、防御を疎かにしまった。

四十六

そして怖れを知らない大胆さに加えて驚くべき力と不屈の気力とを併せ持ったアルガンテが剣をあまりにも激しく振り回したので、大地はそれによって震え、空には稲妻が走った。相手の男はただの一回の攻撃を仕掛ける機会も得ることができず、防戦し、息をつくのがやっとであり、アルガンテの早く激しい攻撃から身を守ることのできる楯も持っていなかった。

四十七

タンクレードイは守りに専念して、攻撃の嵐が過ぎ去るのを待ったが、それは無駄な試みであった。ある時は防衛をもって抵抗し、ある時は転回や素早いスナップによって相手から離れようとしたが、荒々しい異教徒の勢いが衰えなかつたので、遂にはその勢いに自らの身を任せるしか仕方がなくなり、かれもまた闘争心を露わにして、剣を力の限り振り回した。

四十八

理性と剣術は怒りに打ち負かされ、狂気がかれらに力を与え、その力を大きくする。剣が振り下ろされるるとき、その剣は鉄の薄板や鎖帷子を貫通するか、もしくは切り裂き、空を切ることはない。地面には武具の破片が飛び散り、その武具には血が点々と付き、血は汗と混ざり合っている。剣のきらめきは稲光の、ぶつかり合いは雷鳴のようであり、剣で攻撃するとき稲妻が走るように思われた。

四十九

両軍の兵士たちは不安げに類なき残酷な果たし合いを見つめ、決闘者の一挙一動に関して判定を下し、怖れと期待とを交錯させながら勝負の結果を待っていた。大勢の兵士たちの中には身動きをする者も、小さな声で呟く者もいなかつた。各人が無言で、不動の状態であったのだが、その心は激しく動いていた。

五十

決闘者とともに疲れ果て、戦いを続けていたならば、早すぎる死を二人とも迎えていただろう。だがその時、近くの物までをも包み隠す暗い夜の帳が下りる。両方の陣営から伝令がそれぞれ出て決闘者を引き離そうとして、決闘者たちもついには伝令に従う。伝令の一人はフランク人のアリーダーで、もう一人は決闘の申し入れをした賢明で抜け目のないピンドローであった。

五十一

二人の伝令は決闘者たちの剣の間に平和の杖を差し込もうとしたのであり、人類のきわめて古い法が伝令に保証した安全によってかれらの身は守られてい

た。「決闘者たちよーピンドローが叫ぶー君たちは技量において互角であり、名誉においても同等である。決闘はよって終了とする。夜に帰属する休息の権利を犯すことなかれ。

五十二

太陽が昇っている間、人は働くべきであるが、夜の間はあらゆる生き物に平和が与えられる。人々の目に触れず、語られることもない夜の間の勲功は、高潔な心にとつて大きな関心事ではないのだ。「アルガンテが伝令に答える、「闘が迫つたから戦いをやめるといふなら俺は納得できない。だが事跡を証する太陽の光も俺にとつては大切だ。この男には戻ってくることを誓ってもらいたい。」

五十三

もう一人も付け加えて言う、「おまえも約束するのだ、おまえの奴隷となつた者〔オットーネ〕を連れて戻ってくるということ。さもなければ、私がこの決闘のための別の機会を待ち望むということはありえない。」両者が誓いをたてると、決闘を再開する時を定めるよう求められた伝令たちは、かれらが傷の手当てに要する時間を考慮に入れて、その日から数えて六番目の日の朝に定めた。

五十四

凄まじい決闘は、サラセン人たちの心にもキリスト教徒たちの心にも、長い時間わたつて消えることのない大きな驚きと恐怖とを刻んだ。双方の闘士が果たし合いにおいて見せた大胆さと勇氣とを人々はもっぱら称え、二人の闘士の優劣についても語り合ったが、さまざま意見が出され、結論には至らなかつた。

五十五

壮絶な決闘がどのような結末を迎えるのか、人々は占っていたのであり、狂気が徳にまさると言う者もあれば、大胆さは武勇に敗れると言う者もいた。だが、この件に関心を寄せていた他の誰よりも、美しきエルミーニャはその成り行き

を氣にかけ、案じていたのであり、自らの最も大切な部分（心）が変転する軍神の判定に捕らわれていると感じていた。

五十六

エルミーニヤはアンティオーキア国をかつて支配していたカッサーノ王の娘であり、その王国が征服されたとき、かのじよもまた他の戦利品とともに、勝者であるキリスト教軍のもとに置かれた。だが、タンクレーディはかのじよに優しく接し、かのじよはかれの保護のもとで侮辱を受けることなく、祖国アンティオーキアの滅亡に際しても女王として礼遇された。

五十七

秀抜な騎士はかのじよを称え、かのじよを保護し、かのじよに自由を贈った。宝石や金など、かのじよが所有していた価値ある物も、タンクレーディはすべてかのじよの所有のままにした。若くて、精悍な顔つきのタンクレーディのうちに高貴な精神を認めたエルミーニヤは、愛神の虜となったが、愛神は鎖で持つてかのじよを他の虜をつなぐときよりも強く結びとめた。

五十八

かのじよの身体はかくして再び自由を得たが、かのじよの心はつねに隷属状態になった。いとしい男性や大好きな監獄から離れることは、かのじよにとって非常に辛いことであったが、王室の「威厳」（それは高貴な女性がつねに大切にするものであるが）によつてかのじよは出発することを命じられ、年老いた母とともに同盟国（エルサレム）に身を寄せることとなった。

五十九

エルサレムに來たかのじよは、ヘブライ人の国を治める王に迎えられたのであったが、すぐに黒い服を身に付けて、自らの母の邪悪な運命を嘆くこととなった。しかし母の死による悲しみも、祖国から離れた不幸も、かのじよの心から恋の感情を取り除くことはできなかったのであり、燃え盛る恋の炎を消すこともできなかつた。

六十

哀れなエルミーニヤは恋の炎で燃えた。だが、このような状況で期待はほとんど持てなかつたのであり、期待の炎よりも、それよりもずっと大きな記憶の炎を秘かに胸の中で養っていた。その記憶の炎はより（他人には）隠された場所に閉じ込められるほど、それだけ激しく燃えた。かのじよが期待を再び抱くに至つたのは、タンクレーディがエルサレム攻略のためにこの町に來たからであつた。

六十一

他の（イスラム側の）者たちは、多くの国の兵士から成る無敵の強い軍団を前にして恐怖を覚える。エルミーニヤは曇つた表情を晴れやかにし、誇り高い軍勢のほうを嬉しそうに見つめた。いとしい愛人を食い入るような眼で探しながら、武装した集団の中へ視線を注いだ。タンクレーディを探し出すことは容易ではなかつたが、しばしば「ほら、かれがいる」とも言つて、はつきりとかれの姿を認めた。

六十二

王の宮殿の城壁に近いところには古く高い塔がそびえていて、その上に昇るとキリスト教軍の軍勢がすべて見え、山や平野も展望することができる。エルミーニヤは太陽の光が差し込むときから夜が周囲を闇に包むまでそこに座り、キリスト教軍の陣営を見つめて、自らの想いに向つて話をして、溜息をつくのであつた。

六十三

その場所からかの決闘を見たのであり、その決闘の間中、自らの胸の中で心臓が激しく打つるを感じていた。心臓は自らに向かつて言っているように思われた、「あなたの好きな人があそこで死の危険に晒されている」と。苦惱と不安に苛まれつつ、先のわからない決闘の展開を見守っていたが、異教徒（アルガンテ）が剣を動かすたびにかのじよは心に剣の一撃を感じた。

しば迎えた。二人は恋に関すること以外の全ての想いを相手に包み隠さず打ち明けた。

八十

エルミーニヤは恋の想いだけは自分の中に秘めていた、ときに嘆き声をクロリンドに聞かれてしまったこともあったが、恋とは関係のない或る理由で心が病んでいると言つて、自らの運命を嘆いているかのように装つた。クロリンドとは非常に強い友情で結ばれていたので、いつも遠慮なくクロリンドのもとに来ることができ、クロリンドの部屋は（そこにかのじよがいるときも、会合や戦に出ているときも）けつして施錠されることがなかった。

八十一

ある日クロリンドが別の場所にいるとき、エルミーニヤはその部屋に来て、かねてからの望みである自らの秘かな出発の手段と方策について一人で考え込んでいた。揺れ動き休まることのない自らの魂をさまざま想いへと分け、撒き散らしていると、クロリンドの武器と外衣が高い所に吊り下げられているのに気づき、溜息をつく。

八十二

そして溜息をつきながら独り言を言う、「ああ、まことに強いかのじよは何と恵まれているのか。私はかのじよが羨ましくて仕方がない。美貌に起因する誇りや女性としての名譽を羨むのではない。丈の長い衣装によつて、かのじよは歩みを妨害されないのだ。「中にいる女性が外に出ることを良しとしない」嫉妬深い部屋も、勇ましい彼女については閉じ込めることがないのだ。かのじよは武器を身に着け、外へ出たいと思えば出ることができ、「恐れ」も「恥」もかのじよを引き留めない。

八十三

ああ、自然と天はなぜ私の体と魂とを同じように強く作らなかつたのか、そうであつたなら、私もまた、スカートとヴェールではなく、鎧と兜を身につける

ことができたであろうに。それらを身につければ、暑さも寒さも、嵐も雨も、——太陽のあるいは月明かりのもと、一人であるいは付き添われて——戦場に武装して行かんとする私の燃え盛る感情を、抑制することができなかつたであろうに。

八十四

それならば、おお、慈悲を知らぬアルガンテよ、おまえが私の主人と最初に戦うことにもならなかつたであろう、私がおまえより先にかれに会いに行つたであろうから。そして、かれは私の膚としていまここにいて、敵である愛人によつて、甘く軽やかな従属のくびきをかけられていたであろう。かれに足かせを付けたことによつて、私は自分の足かせが軽く、緩くなつたと感じたであろうに。

八十五

それともかりに、かれの右腕が私の横腹を傷つけ、私の心臓を再び切り裂いたならば、その一撃は愛神によつてつけられた傷を少しは消し去つたであろうに。そのとき私の魂は、平和のうちに疲れた体とともに安息を得たであろうに。そして勝利したかれは、涙して埋葬しつ、私の骨と灰とに何らかの譽を与えたであろうに。

八十六

でも、不幸かな、私はありえないことを望んでいる、無益にも愚かしい空想と戯れている。私は粗野な女たちの一人にすぎない者として、恥じらいと悲しみの中にここに留まらう。いや、留まることはやめよう。わが心よ、信用せよ、勇気を出せ。一度くらい私も、武器を身につけることができないのだからか。弱く、力もないけれど、短い間ならば、武器の重みにも耐えられないのだからか。

八十七

私にもできるわ。私を支配する愛神が、その重みに耐える力を私に授けてくれるから。愛神に拍車をかけられたならば、臆病な鹿たちでさえしばしば勇気を

奮い立たせ、戦うのだから。私は本当に戦おうとしているのではないのよ、この武具をつけて人を巧妙に騙そうとしているだけなのよ。私はクロリンドになりすまそうと思うのよ。かのじよの姿の下に私の身を隠せば、きつと町の外に出られるわ。

八十八

城門を警備する者たちは、かのじよに対しては何一つ抵抗しようとしなはずだわ。私は何度も考えても、他に方法が見いだせない。これ以外に開かれた道はないと、私は思うのよ。いまこそ、私にそれを吹き込んだ愛神よ、そして運命の女神よ、罪なき詐欺に恩寵を与えたまえ。クロリンドが王のところにいるいまこそは、私が出発するべきとき。」

八十九

エルミーニヤはこうして決心し、愛神の猛烈な力に刺激され、追いつてられて行動を起こした。自らの部屋と隣り合わせにある「クロリンドの」部屋から盗み出した武具を急いで運び出した。こうしたことをエルミーニヤができたのは、部屋に入ったとき、他の人々がその場を離れ、ひとりになったからである。そして泥棒たちと恋人たちの友である闇が広がり盗みを包み隠したからである。

九十

星明かりに照らされていた天がだんだんと暗くなっていくのを見て、エルミーニヤは自らの行動に遅れが生じないようにするべく、信頼する一人の従者と、大切にする誠実な侍女とを密かに呼んで、かれらに計画の一部を明かした。町の外に出る計画を告げたのであり、ほかの「事実とは違ふ」理由でやむなく出発すると言った。

九十一

忠実な従者は計画を遂行するために必要と思われるものをすぐに整え、エルミーニヤはその間に、足まで垂れていた雅な衣装を脱ぎ棄てた。肌着だけを身につけたかのじよの愛らしさと優美さとは、人のあらゆる空想を凌ぐほどのも

のであったが、「武具を付けようとする」かのじよを助けたのは、共に出発するために選ばれたかの侍女のみであった。

九十二

硬い鉄の武具でエルミーニヤは自らの柔らかい首と金髪の頭とをしつかりと包み、締め付ける。そのか細い手には盾が握られているが、それはきわめて重く、支えきれないほどである。かのじよのからだ全体が鉄の輝きを発し、かのじよは戦士のごとくに振る舞おうと努める。その場にいる愛神がそれを見て、ひそかに笑む、かつてアルカイオス（ヘーラクレス）にスカートをはかせた時のように。¹⁰

九十三

ああ、全身の力を振り絞って、かのじよは支えきれないほどの重荷に耐え、ゆっくりと進んでいく。かのじよを支えるために侍女がその前を進み、かのじよはこの信頼できる友に体をもたれかけている。だが愛神と「希望」とがかのじよを元気づけ、その疲れた手足に活力を与える。こうして二人は従者が待っている場所にたどり着くと、急いで馬に跨った。

九十四

変装して進むかれらは、できるだけ人通りが少ない裏道を選んで進んだが、多くの人に出会い、道の両側にいる人々の武具で薄暗い大気が光るのを見た。だが、かれらの進路を妨害しようとする者はなく、誰もが脇に退いて道を譲った。かの白い外套と人々に畏れられたかの紋章とは、暗闇の中でも人々の目に見えていたからである。

九十五

このような人々の対応によって、エルミーニヤは少し気が楽になったが、自信を得るには至っていないかった。最後に自らの正体が見破られることを恐れていたであり、あまりにも大胆なことをしていると感じていたからである。しかし、城門のところに着いたとき、不安な気持ちを抑えて、警備の者を欺こうと

んでいた、もの音ひとつしなない野と、かの友なる静寂とを、積年の恋を打ち明ける相手として。

百四

そしてキリスト教軍の陣営のほうを見て言った、「おお、ラテン人のテントよ、汝らはわが眼に何と美しく映ることか。汝らがいる場所から吹いてくる風は私を元気づけ、私はそちらへ向かつていくだけで心が慰められる。苦難に満ちた過酷な人生を歩んできた私に、天が恵みのやすらぎを与えたまわんことを。私はそのやすらぎを唯唯あなた方のうちに求め、武器の間にのみ平和を見出すことができるように思うのです。」

百五

どうか私を汝らのうちに迎え給え、愛神がかつて私に約束した慈悲を、ほかの地で囚われた私が愛しいわが主人から授かったかの慈悲を、汝らの中に私が見つけることができますように。私はいまや、汝らの援助を得て、わが王室の名譽を回復しようなどとは思いません。それは叶わないことであり、汝らの中で仕えることができるだけで、私は何よりも幸せなのです。」

百六

かのじよはこのように言ったが、自らにやがて降りかかる嘆かわしい不運を予見する由もなかった。かのじよがいた場所には月の美しい光が射し、その光を直接受けてかのじよの磨かれた武具が発する輝きは、かのじよが付けている外套の白さと相俟って、遠くの方からも見えた。「兜の」銀に彫られた大きな虎の印も輝きを放ち、それを見た人々は誰もが言ったであろう、「あの女だ」と。

百七

かのじよにとつては不幸なことにも、近くには多くの「キリスト教軍」兵士たちが待ち伏せの場所を作っていた。兵士たちを統括していたのは二人のラテン人兄弟で、名をアルカンドロとポリフェルノといったが、かれらは「エルサレム」サラセン人の居住区に羊や牛の群れが運び込まれるのを防ぐために配置

されていた。「エルミーニヤの」従者がその場所を通り抜けたのは、そこから離れたところを素早く通り過ぎたからであった。

百八

若いポリフェルノは父親がクロリンドアによつて殺されるのを目の前で見たのであつたが、白く美しい外套を着た人物（エルミーニヤ）を見たとき、かの誇り高き女戦士（クロリンドア）の姿をそこに認めたと思つた。隠れ潜んでいた仲間の兵をその女戦士のほうに向かわせ、心の突然の衝動を抑えることなく（かれはすぐに激情に駆られ、その激情は狂気じみていた）、「おまえを殺してやる」と叫び、槍を投げたが、それは女戦士に当たらなかつた。

百九

清らかな水をたたえた水流を探しまわる喉の渇いた鹿が岩の下から湧く美しい泉を、あるいは木陰を流れる小川を見つけ、その疲れた体を夏の日差しから遮られた水辺に休めようとしたその時、犬の群れに見つかり、来た方へ向かつて逃げ、恐怖によつて疲れや暑さを忘れるまさにそのように、

百十

病んだ心のつねに火種であつた恋の渴きを喜ばしく誠実な歓待のうちに癒し、疲れた魂を休めることができると信じていたエルミーニヤは、そうした信念を打ち砕こうとする者がいま自らに迫り、その者の武器が発する音や威嚇の声を聞くにいたり、驚き慌て、それまで抱いていた望みを捨てて、おののきつつも自らの駿馬に拍車をかけた。

百十一

哀れなエルミーニヤは逃げ、かのじよを乗せた馬はものすごい速さで大地を駆けける。もう一人の女（エルミーニヤの侍女）もまた逃げ、狂暴な男（ポリフェルノ）は多くの兵を連れて二人を追い続ける。その頃、いまとなつては遅すぎず知る知らせをもつてかの善き従者がキリスト教軍の陣営から戻ってきたが、二人が消えたことに不安を抱いてかれも逃避し、かくして三人とも「恐怖」に追い

立てられて野に散っていった。

百十二

だが、より思慮深いもう一人の兄弟「アルカンドロ」は——かれもクロリンダになりすました女を目撃したが、女との距離がポリフェルノほど近くなかったので——待ち伏せ場のところに留まり、伝令を自軍の陣営に送って、家畜や羊の群でも戦利品の獣でもなく、怖気づいたクロリンダを、兄弟のポリフェルノが追跡していることを伝えた。

百十三

指揮官であり、単なる女戦士ではないクロリンダが夜に、緊急の事態でもないのに町の外に出るはずがないとアルカンドロは思い、理性的に考えてもそれは腑に落ちないことだったが、善きゴツフレードに判断を委ねるとともに指示を仰ぎ、その命令に従って行動しようとした。こうした事態はキリスト教軍の知るところとなり、テントにいたラテン人の間でも語られた。

百十四

タンクレーディは、先ほどの伝言¹²には疑念を抱いたものの、この新たな知らせを聞いて、解した。「ああ、おそらく私に好意を寄せてここへ来ようとしたのだろう、私のために身の危険に晒されているのだろう。」ほかのことには考えを巡らせず、重い武具の一部を取ると、馬に乗り、何も言わずに急いで出発した。さまざまな情報や新しい足跡を手掛かりに、馬を全速力で走らせて「クロリンダになりすました女」を追った。

・第六歌に関して西洋で描かれた挿絵を参考までに紹介する。一七六〇年にヴェネツィアで刊行された版より引用。



第 32 節に関係する挿絵



第 89 ~ 91 節に関係する挿絵

註

- 1 翻訳には以下の版を用いた。Torquato Tasso, *Gerusalemme liberata*, a cura di Roberto Fedi, Salerno editrice, Roma, 1993
- 2 イスラム側を支援するエジプト軍がまもなくやってくることは、第五歌八十六節でキリスト教軍陣営にやってきた使者によって読者に伝えられている。イスラム側には第六歌十節で述べられるように、ソリマーノに率いられたアラブの軍勢も援軍として来ることになっている。
- 3 戦いの勝敗を代表者同士の決闘で決める例は、『イーリアス』第三歌におけるパリスとメネラオスの決闘、『アエネーイス』第七歌でのアエネーアスとトルムヌスの決闘など、古代ギリシヤ以来の西洋文学で多く見られる。
- 4 ニケーアは第一次十字軍がエルサレム到着前に攻略したトルコ北東部の都市。ソリマーノがニケーアのスルタンであったことも歴史的事実である。ただし、第一次十字軍と戦ったのはソリマーノの息子であり、その息子も（第九歌で述べられるように）エジプト軍と同盟を結んで戦ったわけではない。

- 5 第二歌でエルサレムにやってきてイスラム側についた女戦士であるが、かのじよの生い立ちについては第十二歌で説明されている。
- 6 エンケラドスは一つ目の巨人で、ゼウス（異説ではアテーナー）によりエトナ山の下に埋められた。「フイリステアの巨人」とは、ダヴィデによって殺された巨人ゴリアテのこと。
- 7 オットーネが落馬したにも拘わらず、馬から降りずに相手を攻撃したことを指す。
- 8 タツソが防衛戦術について詳しかったことを窺わせる一節。十九世紀の著名な小説家マンゾーニは、『いなすけ』の第五章で登場人物の一人をして、タツソのことを「あの博学の偉人は騎士道のあらゆる規則を掌をさすように心得ていた」と言わしめている。
- 9 アンティオーキアも第一次十字軍によって滅ぼされた国で、そのときアンティオーキア王カッサーノは殺された。エルミーニヤはそのカッサーノの娘ということに物語ではなっているが、タツソによって創出された空想上の人物である。
- 10 ギリシャ神話によると、ヘーラクレスは奴隸としてリューディア国の女王オムバレーに売られたとき、女装したり、糸を紡ぐなど女の仕事をしたりすることがあったという。アルカイオスはヘーラクレスの祖父。
- 11 この場面は第三歌三十五節で述べられている。
- 12 百一節においてエルミーニヤの従者が述べたことを指す。